

## C 特別支援学校（聴覚障害）

### （1）学校の概要

C 特別支援学校（聴覚障害）は、小学部が平成 16 年、中学部が平成 22 年に設置され、幼稚部から中学部まで、全校で幼児・児童・生徒が 9 名が在籍し、教職員 25 名で構成されている。

中学部を卒業後、本校へ進学する生徒は公共交通機関を利用し 60 分以上の通学時間となる。

C 特別支援学校の校舎は、同県の特別支援学校（肢体不自由）と廊下でつながっており交流が盛んである。その他、きこえやことばの通級指導を小・中学校に在籍する児童に指導している。

### （2）ICT 活用状況

県の ICT 事業平成 25 年、平成 26 年対象校となっており、校内設備は、各教室に移動型の大型ディスプレイが設置され、教科書やパワーポイントで作成した教材を投影し、必要に応じて書き込んでいる。大型ディスプレイの使用方法については、販売メーカーの営業担当者が訪問し職員研修会としてレクチャーされている。保守に SE（システムエンジニア）が週に一度来校し、サーバーやログを確認している。使用方法や疑問点等にも対応してくれている。

iPad は、生徒一人に一台貸与されており、使用後職員室のカギがかかるロッカーに保管し、ナンバーリングにより管理されている。アプリは、有料も含め購入（カード）でき、各教師が希望するアプリを校内倫理委員会で協議し決定している。どのようなアプリが良いか職員間で常に情報を共有している。iPad を授業で利用した教師へどのような利用法をしたかメモ書きで報告するルールを作っており、利用法については、職員で共有できるようにしていた。

これらの iPad 利用について、近隣の特別支援学校連絡会において情報交換している。

学校玄関、廊下に 8 台の 40 インチモニターが設置されており、防災情報やインフォメーションを映し出していた。児童・生徒たちの身近なところに情報機器があり、画面を観ることに抵抗感が感じられないようにしていた。

### （3）事例

1) 手話で感想を表現したものを iPad に録画し、再生しながら日本語にする授業を実施した事例

- 自分で感想を表現するが、記憶に残らないことが多いことから、自分の手話表現を再度観ることにより、文章化を行い言語力（読む、書く）の向上を目指す。

2) 音声訓練アプリを利用して、母音の特徴であるフォルマント周波数を分析して発音を可視化し発声訓練を実施した事例

- 自分の発音が iPad 上に表記されるため、正しい母音を身に付けることが、目的である。相手を必要とせず、自己練習ができるメリットがある。

3) iPad を筆順・手話・筆談パットとして利用した事例

- 筆順について、色を変えながら、正しい漢字の筆順を学ぶことができる。自己学習ができるので、興味をもって取り組める。

- 手話について、動画を観ながら自己学習ができ、学ぶことができる。繰り返し再生できるので、自分のペースで覚え復習ができる。
  - 筆談パットについて、iPad 画面が、教師と生徒の2画面で表示され、字の向きも相手側に向けることが特徴である。また、字の色も教師と生徒で変えることができる。
- 4) iPad を修学旅行に持参した事例
- 修学旅行に iPad を持参し、カメラ機能を利用し撮影する。データを学校に送信し、学校便りをリアルタイムで更新した。
- 5) 遠足でストリートビューとして利用した事例
- 初めて訪れる街や見学場所を訪問したときに、iPad を利用し目的地までの道順を標記できる。画面の切り替えで、写真モードにもできるので確認しやすい。

#### (4) 特徴的な点に関するまとめ

聴覚障害のある幼児・児童・生徒にとって、視覚的情報は大きな情報保障につながるものであり、教育の場を限定することなく、操作方法の工夫により、多くの幼児・児童・生徒が利用できる。

また、事例3)のように iPad を利用することで、自分が利用できる時間に、発声・筆順・手話等の自己学習が深められることが、特徴として挙げられる。

(定岡 孝治)

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成28年3月）、73-74に記載された内容である。